



曾丹集と漢詩文：「つらね歌」と「蟬聯体」の詩について（一）

丹羽，博之

(Citation)

国文学研究ノート, 12:1-13

(Issue Date)

1980-07

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012217>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012217>



曾丹集と漢詩文

―「つらね歌」と「蟬聯体」の詩について―(一)

丹羽博之

日本文学に与えた漢詩文の影響については、已に数多くの先学の御論考があり、平安文学においても、漢詩文の受容、摂取は測り知れないものがある。

本稿では、平安中期の異色歌人曾禰好忠の家集である曾丹集に収められている、尻取り歌の形式を持つ「つらね歌」と、漢詩の尻取り歌とでも言うべき「蟬聯体」の詩を比較、検討することによって、尻取り歌という極めて特異な形式をとる「つらね歌」創作の動機や好忠の漢詩文の受容態度を考察したい。

一、「つらね歌」について

(一)

「つらね歌」と言えば、どうかすると中世の「連歌」とまちがえられてしまいそうなほど、あまり知られていない小さな作品であるが、この「つらね歌」については、『和歌文学大辞典』には、その項目がない。

「つらね歌」について説明したものを二つほど掲げると、契

沖は『雑々記』の中で、

曾丹か集につらね歌とてあるは、初の歌のはての句の詞を次の歌の初の句にたゞめるをいへり。

と説明しており、岩波古典文学大系の『平安鎌倉私家集』に収められている「好忠集」の頭注では、

尻取り歌で、前の歌の最後の語句を取って次の歌の冒頭に詠みこんだもの。

と説明されている。神作光一、島田良二両氏の『曾禰好忠集全釈』では、「尻取り歌」とだけ説明されている。

この、尻取り歌の形式をとる「つらね歌」の例は、『私家集大成中古』など私が調べた限りでは他の例が見当たらない。^注神作光一氏も「このつらね歌という形式が、果して好忠によって創作されたものであるかどうかについては、なお考えたい。」と述べられている。

(二)

曾丹集は、「毎月集」、「好忠百首」、「つらね歌」、「源

順百首」の四大歌群から構成されているが、今回取り上げた「つらね歌」は、さらに三つの小さな歌群に分かれている。

この「つらね歌」は、諸本によってかなりの異同があるが、「つらね歌」の形式として最も整っている、『平安鎌倉私家集』に収められている、宮内庁書陵部蔵藤原為相筆本によって見ていく。最初の470番の歌から473番までの四首の歌は、

470 戀しさを慰めがてらこゝろみに返してみばやせなが袖のを
も

471 思ひつゝふるやのつまの草木も木も風吹くごとにものをこそ
思へ

472 思へどもかひなくてよを過すなるひたきの島と戀ひやわた
らん

473 渡らんと思ひきざしてふじ川のいまにすまぬは何の心ぞ
というもので、傍線を付した箇所が尻取り歌、つまり「つらね歌」の形式をとっている。次の例を掲げると、

圓融院御子の日に、召なくて参りて、さいなまれて又の
日、奉りける

474 與謝の海の内外の濱のうらさびて世をうきわたる天の「橋
立

と名を高砂の松なれど、身は牛窓によする『白波』の、
たづきありせば、すべらぎの大宮人となりも「しなまし」
の、心になふ身なりせば、何をかねたる命とか知る」
というものである。この歌は、小右記や今昔物語などで有名な、
寛和元年に紫野で催された圓融院御子の日の行事で好忠が追い

出された事件の翌日に奉った歌である。この歌の「名を高砂の松なれど」で始まる左注的散文を見ていくと、先ず、鉤括弧を付した474番の歌の末尾の「橋立」から読むと、「よする白波」まで、

橋立と名を高砂の松なれど身は牛窓によする白波
というように、一首の歌ができあがる。そして、この「橋立と名を高砂」の歌の終りの二重鉤括弧を付した『白波』から読むと、『なりもしなまし』まで、

白波のたづきありせばすべらぎの大宮人となりもしなまし
というように、これもまた一首の歌ができあがる。同様に、この『白波のたづきありせば』の歌の末尾の鉤括弧を付した「しなまし」から読むと、

しなましの心になふ身なりせば何をかねたる命とか知る
これもまた、一首の歌になる。次に掲げる六首の歌も同じ日に奉られた「つらね歌」である。^{注二}

475 與謝の海とすまの島にもあらねども雲間を過ぐるほどぞか
なしき

476 かなしきはからにもあらぬみ山べにうもれて行かぬ谷川の
水

477 水早み船もかよはぬ谷の面にとまらぬ泡の身をいかにせん
478 いかにせん涙の鹽に朽ちぬべし世にはからくて住の江の松

479 住の江の松は緑の袖や洗ふ名をだに變へばものは思はじ
480 思はじや名をば埋まぬ世なりとも煙と立たばわかむものは

以上見てきた三つの「つらね歌」の内、初めのは、女性に仮託された恋の歌であり、後の二つは、例の円融院御子の日の行事の翌日に奉った歌であり、すべて身の不遇を述べた歌ばかりである。

しかも、「ものをこそ思へ」、「しなまし」、「かなしき」、「いかにせん」、「思はじ」といった悲痛な響きを持つ語を尻取り式に次々とたたみかけるようにして詠み継ぐことによつて、一首の歌だけでは歌い尽せない思いを効果的に表現している。

二、「蟬聯体」の詩について

(→)

この「蟬聯体」と言う聞きなれない詩の形式というのは、「蟬聯格」とも呼ぶが、諸橋轍次氏の『大漢和辞典』の「蟬聯」の項には、

① 蟬聲の連續して絶えないやうにつらなり続くこと。〔史記、陳杞世家、索隱述贊〕蟬聯血食〔梁書、王筠傳〕

自開闢以來、未有爵位蟬聯、文才相繼、如王氏之盛者也。

〔左思、吳都賦〕布護皋澤、蟬聯陵丘。〔注〕善日、蟬聯、不絶貌。

② 漢詩で前段の終を承けて下句を開くもの。文字ぐさりの類。一羣嬌鳥共啼花 啼花戲蝶千門側のやうなもの。

と説明されている。また、宋末期の詩人である嚴羽の著わした

『滄浪詩話』の「詩体」の項には、

有後章字接前章者 曹子建贈白馬王彪之詩是也。

〔後章の字前章に接するものあり。曹子建白馬王彪に贈るの詩これなり。〕

とある。「蟬聯体」の詩については、他にまとまった論考が見当たらない。以下、私が調べた例を掲げる。

『詩経』の「大雅」の中に「既醉」という詩がある。この「既醉」という詩は、祭が終わって宴を賜い、父兄が天子の恩を感謝して、天子の幸福を祝う、という内容のものであるが、その詩というのは、

既醉以酒 既飽以德
君子萬年 介爾景福

既醉以酒 爾般既將
君子萬年 介爾昭明

昭明有融 高朗令終
令終有愒 公尸嘉告

其告維何 邊豆靜嘉
朋友攸攝 攝以威儀

威儀孔時 君子有孝子
孝子不匱 永錫爾類

(以下略)

（中国古典文学全集『詩経・楚辞』（平凡社）による。返り点引用者。）

というもので傍線を付した箇所が、尻取り、つまり「蟬聯体」になっている。^{注四}

六朝末期に陳の徐陵が撰んだ、『玉台新詠』の巻五に収められている、沈約の「擬青青河邊草」という詩は、遠方の長城に出征している夫を思う妻の身になり代って歌った樂府である。その詩を掲げると、

漠漠^一牀上塵 中心憶^二故人^三

故人不可憶 中夜長歎息^四

歎息想容儀 不欲長別離^五

別離稍已久 空牀寄杯酒^六

（新釈漢文大系『玉台新詠』（明治書院）による。以下

『玉台新詠』は、すべて同書による。）

というもので、「歎息」、「別離」などの悲しげな響きを持つ語が尻取りとなっており、この詩は、完全な「蟬聯体」の形式をとっている。この詩のように、一首が完全な「蟬聯体」とする詩もあるが、途中で「蟬聯」が終っている詩もある。

例えば、『文選』や『玉台新詠』『樂府詩集』にも収められている、後漢の蔡邕の作とされている「飲馬長城窟行」の詩は、

青青河邊草 綿綿思遠道^一

遠道不可思 宿昔夢見之^二

夢見在他鄉 忽覺在^三他鄉^四

他鄉各異縣 展轉不可見^五

枯桑知天風 海水知天寒^一
入門各自媚 誰肯相為言^二

（以下八句略『玉台新詠』巻二）

というものである。この詩は二十句から成っているが、七句目の「他鄉各異縣」までが「蟬聯」になっており、後半は省略した部分を含めて「蟬聯」になっておらず、不完全な形である。以上見てきた二首の詩は、句ごとに尻取りになっている「蟬聯体」の詩である。

（二）

次に、先ほど掲げた敵羽の『滄浪詩話』に例として挙げられている「贈白馬王彪」の詩を掲げる。この詩は、『文選』や「曹植集」「古詩源」などに収められている。作者の曹子建というのは、「七歩の詩」などで有名な、建安文学を代表する陳思王曹植のことである。その曹植が仲の良かった弟の白馬王彪に周圉の妨害で再会できずに国元へ帰って行く時に贈ったのがこの詩である。

序日 黃初四年正月 白馬王 任城王 與余俱朝京師 會

節氣 到洛陽 任城王薨 至七月 白馬王還國 後有司

以 二王歸藩 道路宜異宿止 意每恨之 蓋以大別在數日

是用自剖 與王辭焉 愼而成篇

謁帝承明廬 近將歸舊疆

清晨發皇邑 日夕過首陽

伊洛廣且深	欲濟川無梁	汎舟越洪濤	怨彼東路長	顧瞻戀城闕	引領情內傷	大谷何寥廓	山樹鬱蒼蒼	霖雨泥我塗	流潦浩縱橫	中逵絕無軌	改轍登高岡	修坡造雲日	我馬玄以黃	玄黃猶能進	我思鬱以紆	鬱紆將何念	親愛在離居	本圖相與偕	中更不克俱	鴟梟鳴衡轡	豺狼當路衢	蒼蠅聞白黑	讒巧反親疎	欲還絕無蹊	攬轡止踟躕	踟躕亦何留	相思無終極	秋風發微涼	寒蟬鳴我側	原野何蕭條	白日忽西匿	歸鳥赴高林	翩翾厲羽翼	孤獸走索羣	銜草不遑食	感物傷我懷	撫心長太息	太息將何爲	天命與我違	奈何念同生	一往形不歸
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

孤魂翔故域	靈柩寄京師	存者忽復過	亡沒身自衰	人生處一世	去若朝露晞	年在桑榆間	影響不能追	自顧非金石	咄咄令心悲	心悲動我神	棄置莫復陳	大夫志四海	萬里猶比鄰	恩愛苟不虧	在遠分日親	何必同衾纊	然後展殷勤	憂思成疾疢	無乃兒女仁	倉卒骨肉情	能不懷苦辛	苦辛何慮思	天命信可疑	虛無求列仙	松子久吾欺	變故在斯須	百年誰能持	離別永無會	執手將何時	王其愛玉體	俱享黃髮期	收淚即長路	授筆從此辭
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

(漢詩大系『古詩源』(集英社) 返り点引用者)
 この詩は、先に掲げたような句ごとの「蟬聯体」とは異なり、
 章ごとに整然とした形で「蟬聯体」になっている。ただし、
 『文選』及び「曹植集」では、第一章を十句目の「引領情内傷」
 で区切り、二章に分けている。そうすると、この詩は七章から

成り立つことになり、第一章と第二章は「蟬聯」にならないが大差はないと思う。

また、『古詩源』『曹植集』では、この詩に序が有る。その序では、周囲の横槍で白馬王彪と一緒に帰れなかったことを述べており、その終りの部分で、

是用自剖 與王辭焉 憤而成篇

とあり、意味は「この故に胸もくだける思いで白馬王といとまをつげたが、憂憤の情はこって一篇の詩となった」。ぐらいであろう。この詩の「蟬聯体」の説明で、伊藤正文先生は、^{注六}これは音声の連続を意味上に及ぼし、章と章の断絶をなくし、情緒の昂揚をはかるものである」と説明されている。しかも、「踟蹰」、「太息」、「心悲」、「苦辛」といった悲痛な語が「蟬聯」になっている。これは、先ほど述べたように、「つらね歌」が尻取り歌の形式をとって、沈淪の思いを単なる訴嘆の歌よりも、一層効果的に演出しているのと相通じるところがある。

もう一首章ごとの「蟬聯体」の詩を掲げる。晋の潘岳（潘安仁）が、亡妻を偲び悼んだ詩に「悼亡詩三首」というものがある。この詩は、『文選』の巻二十三には、三首とも収められており、『玉台新詠』の巻二には、その内の二首が収められている。この「悼亡詩三首」は、後代の詩人のために妻を悼む詩の祖型を提供しており、唐の元稹、宋の梅堯臣などの作品が良く知られている。しかし、それらの作品は「蟬聯体」にはなっていない。

さて、この「悼亡詩三首」の中で、一首目の詩は「蟬聯体」

になっていないので省略するが、二首目の詩は、

皎皎窓中月	照我室南端
清商應秋至	淠暑隨節闌
涼涼涼風升	始覺夏衾單
豈日無重續	誰與同歲寒

歲寒無與同	朗月何朧朧
展轉眄枕席	長簾竟牀空
牀空委清塵	室虛來悲風
獨無李氏靈	髣髴覩爾容
無衿長歎息	不覺涕霑胸

霑胸安能已	悲懷從中起
寢興目存形	遺音猶在耳
上懸東門吳	下愧蒙莊子
賦詩欲言志	此志難具紀
命也可奈何	長戚自令鄙

（新釈漢文大系『文選』（明治書院）による。）

というもので、傍線を付した「歲寒」、「霑胸」といった、悲しげな響きを持つ語が「蟬聯」になっており、連綿とした亡妻への慕情を効果的に表現している。三首目の詩は煩雑になるので掲げないが、この詩も「爾祭」、「徘徊不忍去」が「蟬聯」になっている。

また、第一章の五・六句目の「涼涼涼風升 始覺夏衾單」の

二句や、第二章の六句目の「室虛來悲風」の表現は、曾丹集の注七
中の

233 肌寒く風は夜ごとになりまさる我見し人は訪れもせず

234 わが背子が来まさぬ宵の秋風は来ぬ人よりもうらめしきかな

236 まつよひの風だも寒く吹かざらば見えこぬ人をうらみましやは

391 秋風の吹く衣手の寒ければ片敷く方に波ぞ立ちける

(歌番号、本文は『曾禰好忠集全釈』による。)

などの歌を想起させる。また、第二章の五句目の「牀空委清塵」や先に掲げた沈約の「擬青青河邊草」の詩の「漠漠牀上塵」の表現は、「毎月集」の注八

229 塵積もる夜床は山となりぬらし秋の夜をへて寝る人もなみを連想させる。「毎月集」の場合は、女の立場から夜離れた男

を歎いた歌であるのに対して、「悼亡詩三首」は亡くなった妻を偲んで詠んでいるが、その表現には類似性が見られる。

ただ、私がここで述べたいのは、これらの潘岳の詩句を好忠が摂取したと言うのではなく、このような漢詩句の表現が好忠の歌の発想の基盤となったことを述べたいのである。

潘岳の詩は、日本の詩人にも愛好されており、『文選』巻十三に収められている「秋興賦」の中の、白髪が現われたことを詠んだ「始見二毛」の句は、「懷風藻」に収められている藤原宇合の「悲不遇」の詩の「二毛雖已富」、『本朝文粹』には、紀長谷雄の「春雪賦」の「點人皆催二毛之年」、源英明の「見

二毛」の詩の「照見二毛姿」「潘岳者晋名士」、『菅家文章』の「白毛歎」の「初見春秋已過潘」などに、『文選』愛好時代における潘岳の詩句の踏襲が見られる。注九

(三)

「蟬聯体」の詩は、「擬青青河邊草」、「飲馬長城窟行」などのように、句ごとに承け継がれていくものと、「贈白馬王彪」、「悼亡詩三首」などのように、章ごとに尻取りになっているものの二種類がある。この二種類の「蟬聯体」の詩で、どちらがより「つらね歌」に近いか、ということも当然問題となってくるであろう。漢詩の一句と和歌の対応では、大江千里の「句題和歌」がすぐに想起されるし、漢詩一首と和歌の対応では、「新撰万葉集」が想起される。この、句ごとの「蟬聯体」の詩と、章ごとの「蟬聯体」の詩とでは、どちらがより「つらね歌」に近いかと言われると非常に難しい問題であるが、深刻な内容を歌いあげている「贈白馬王彪」や「悼亡詩三首」などに例の見られる章ごとの方がより「つらね歌」に近いと思われる。漢詩の一章だと和歌一首に比べて長すぎる点が気にかかるが、好忠が興味を持ったのは「蟬聯体」の技巧であったと思われるので、漢詩一章と和歌一首の量の違いは余り問題にはならないと思う。この問題については今後もう少し考察を加えたい。

「蟬聯体」の詩の例は、以上見てきた他にも数多く見られる。今、気づいた詩を表にしてみる。

新詠 玉台				文選					詩經			出典	
三	二	二	一	三十一	二十七	二十五	二十五	二十四	二十三	大雅	大雅	大雅	卷
擬相逢狹路間	皎皎窓中月	青青河邊草篇	飲馬長城窟行一首	謝法曹（贈別）惠連	飲馬長城窟行	酬從弟惠連	登臨海嶠、初發疆中作。 與從弟惠連見羊何共和之	贈白馬王彪	悼亡詩三首	既醉	下武	文王	作品名
荀昶	潘岳	傅玄	蔡邕			謝靈運	謝靈運	曹植	潘岳				作者
○	△	○	○	△	○	△	△	△	△	△ ○	△	△ ○	區別
「易知」「栖鶴」	「井陘」「一言」「君家」	「歲寒」「霑胸」	「草」「道」「春」「期」	「遠道」「夢見」「他鄉」 「無陳」	「遠道」「夢見」「他鄉」	「暮春」	「心胸」「分離」「洲渚」	「玄黃」「踟躕」「太息」 「心悲」「苦辛」	「徘徊不忍去」 「歲寒」「霑胸」「爾祭」	「昭明」「令終」「威儀」 「孝子」	「受天之祐」 「王配千京」「成王之孚」	「無念爾祖」 「文王孫子」「不顯亦世」 「生此王國」「文王」「商孫子」 「候于周服」「裸將」	「蟬聯」になる語
	『文選』卷二十三と重複				『文選』卷二十七と重複								備考

米 ○印は句ごと、△印は章ごとの「蟬聯体」であることを示す。

三	擬青青河邊草	荀昶	○	「臨左」「寤寐」「他邦」	
五	擬青青河邊草	沈約	○	「故人」「歎息」「別離」	
七	擬青青河邊草	梁武帝	○	「昔期」「音徽」	
七	芳樹	梁武帝	○	「一葉」「重疊」	
七	戲作謝惠連體十三韻	皇太子	○	「春風」「開盤」「眼前」	
七	節文				

三、好忠と漢詩文

この表を見て気づくことは、
一、「蟬聯体」の詩は、漢、魏、六朝時代の詩人にしばしば好んで用いられているが、後代にはあまり例が見当たらない。
二、枕草子に「ふみは文集、文選」とあり、平安時代の貴族の必読書であった『文選』や、日本文学に多くの影響を与え、日本人に親しまれてきた『詩経』や『玉台新詠』に例が多い。
三、「蟬聯」になっている語は例外も多いが「太息」、「心悲」、「徘徊不忍去」など悲痛な響きを持つ語であり、詩の内容を盛り上げている。このことは、「つらね歌」の場合も同様で「ものをこそ思へ」、「かなしき」、「身をいかにせん」、「ものは思はじ」など好忠の心情を表わす語が詠みつけられており、訴嘆の効果を高めている。

以上、先学の御考察からも、好忠は、漢詩文の素養が相当にあり、漢詩文を和歌に取り入れることに積極的な態度を取っていたと考えるべきであろう。好忠が小野宮家と密接なつながりを持っていたのは、権門への接近が主たる理由であろうが、頼忠や公任に代表される小野宮家の漢詩文の愛好や、小野宮家に出入りしていた漢学者達との交遊とも関係があったのではない

四、句ごとの「蟬聯体」の詩は、メロディを伴って歌われた楽府の詩に数多く見られる。また、「飲馬長城窟行」の流れをくむ

「青青河邊草」、「擬青青河邊草」などの閨怨詩に例が見られる。

か。そのような小野宮家に接近するには、和歌だけでなく漢詩文の素養も必要であり、好忠は漢詩の翻案歌を作ったと見るのは考え過ぎであろうか。

^{注十五}山岸徳平氏、^{注十六}川口久雄氏、^{注十七}五島和代氏が已に指摘されているように、当代の碩学源順は、漢詩の遊戲技巧詩である「回文織錦詩」の技巧を模倣して、双六盤歌を作っている。^{注十八}好忠とかなり親交のあった源順が「回文織錦詩」を模倣して双六盤を作ったことに刺激されて、杳冠歌、碁盤歌など新奇な和歌の類聚形式が流行していた当時、新しい技巧歌の形式を模索し、その技巧を中国の遊戲技巧詩に求めた時に、好忠の目に止ったのがこの「蟬聯体」の詩であったと考えられる。

順の双六盤歌、碁盤歌を実際に見ていくと、かなり手の籠んだ複雑な技巧がどここされているが、そこに詠まれている歌とというのは、例えば、

(双六盤歌)

56 するかなるふしのけふりもはるたてはかすみとのみそみえ
てたなひく

62 はなかとてゆきのまにまにをりくれとかつきえかへりてに
もたまらず

(碁盤歌)

67 たのみのふかゝらすのみみゆるかな人のこころのあさく
なるさま

68 まかせてしたねもおひねはるのたのかへすかへすもうき
はわか身を

(書陵部蔵「歌仙集」私家集大成中古Ⅰ順集Ⅱ)

というものであり、平明な自然詠がほとんどである。^{注十九}碁盤歌の68番の歌のような不遇述懐歌もわずかり見られるが、「つらね歌」のように、切迫した悲痛な響きは感じられない。順は双六盤歌、碁盤歌を技巧的なもの、遊戲的なものとして創作しており、その巧緻性を楽しむといった風に感じられ、遊戲歌で終っている。それに対して好忠は、「つらね歌」という技巧を踏み台にして不遇をより強く訴えかけようとしている。歌の形式の斬新さや、技巧を利用してまで訴えかける好忠の貪欲なまでの態度が看取され、訴嘆歌となり得ている。同じ漢詩の技巧を模倣するにしても、順のように遊戲的な方向に走らずに、訴嘆の調べを持たせたとくに、好忠の真面目がうかがわれるのである。

このことは、百首歌中の杳冠歌についても言える。好忠百首が不遇述懐歌を中心に杳冠歌を詠んでいるのに対して、順百首は四季の歌を中心に杳冠歌を詠んでいる。^{注二十}また、応和元年に二児を次々と失った順は、「無常の思ひ」から沙弥満誓の例にならって「世の中を何にたとへん」の句を頭に詠みこんだ歌を十首並べて作っている。しかし、その内容は無常の述懐であって不遇の述懐ではない。こうしたところにも同じ技巧歌を詠むにしても、好忠と順の違いがはっきりと見て取れるのである。

では、両者の相違は何に起因するのであるか。はっきりと結論づけることは難かしいけれども、両者の出自の違いが大きな原因であったと考えられる。嵯峨源氏である順と父祖の名も

伝わらない好忠との相違である。そうした好忠にしてみれば、何の変哲もない歌ばかり詠んでいては永久に世間から顧みられないのである。出自卑しき好忠が、他の専門歌人達と互角に渡り合い、世の耳目を集め、より強くアピールするには、他の歌人にはない何かが必要であつたわけである。「百首歌」「毎月集」「つらね歌」といった新形式の創始、王朝和歌の常識を破つた特異な歌、それら苦心の作品を生み出す原動力となつたのは、曾禰氏という家柄であつたと考えられる。

さて、それでは、この「つらね歌」はどれほど訴嘆歌としての働きかけをしたのであろうか。「つらね歌」を奉つた翌年に催された「寛和二年六月十日内裏歌合」に好忠は出席している。それ以前にも、好忠は「貞元二年八月十六日三条左大臣藤原頼忠前裁歌合」に歌合の後で歌を奉つており、「天元四年四月廿六日故右衛門督齊敏君達誼合」といった私的な歌合にも出席している。しかし、能宣、長能、公任といった当代一流の歌人が居並ぶ晴れの内裏歌合に出席できたのは初めてのことである。内裏歌合に出席できたのは、勿論それまでの歌人としての評価があつたからであらうが、前年に奉つた「つらね歌」が訴嘆歌として大きな役割を果たしたものと思われる。

曾丹集の基調は訴嘆調と言われてきたが、その訴嘆調の結晶が、この「つらね歌」であり、漢詩の技巧を利用した訴嘆歌として最大の効果を発輝したものと考えられる。

平安時代の和歌が漢詩文をどのように受容したかについては、

今後まだまだ考察の余地があると思われるし、好忠においても他にもう二・三例漢詩文とのつながりを持つ箇所が指摘できるように思われるがこれについては、稿を改めたい。

「蟬聯体」の考察を進めるにあたっては、中国文学の伊藤正文、一海知義、山田敬三の諸先生方から多くの御教示をいただいたことを御礼申し上げます。

注

注一 『曾禰好忠集の研究』一一六頁。

注二 池田亀鑑氏「曾禰好忠についての疑問と新資料」（『文学』昭和九年八月）『曾禰好忠集全釈』四六六頁。

注三 藤岡忠美先生は、「曾禰好忠と遊戯技巧歌」（『藤女子大学国文学雑誌』昭和四二年十一月）で、「つらね歌」は、「各首がすべて切々たる不遇の訴えをうたい、前歌の結句を次の歌の頭に詠みこむという連続形式をとるために、それだけ息も切らせぬまとまりで、純一な訴嘆の表現になり得ているのである。」と述べられている。

注四 目加田誠氏は、中国古典文学全集『詩経・楚辞』で、この「既醉」の詩を、「前章の終りの句を次章の首にもってくることは、大雅の一つの形式である。」と説明されている。

注五 この詩と、その次に掲げた、「飲馬長城窟行」の詩の技巧については、已に小沢正夫氏が『古今集の世界』（塙書房）の「第九章句題考 一、六朝時代の句題詩」（二七九

（二八〇頁）で紹介されている。小沢氏は、これら二首の詩を宋の郭茂倩編の『樂府詩集』から引用されているが、『文選』『玉台新詠』にも収められている。小沢氏は、この二首の詩の技巧を「いわゆる文字鎖の形式」と説明されている。

注六 中国古典文学大系『漢・魏・六朝詩集』（平凡社）の一四一頁の「贈白馬王彪」の詩の注。また、次に掲げる潘岳の「悼亡詩三首」の技巧について興膳宏氏も、中国詩文選『潘岳陸機』（筑摩書房）一二七頁で、同様のことを述べられている。

注七 孤閨に風が吹くという表現は、漢詩（特に閨怨詩）に多く見られる。「文選」卷二十七や「玉台新詠」卷二にも収められていて、「玉台新詠」では、魏明帝の作とされている。「昭昭素明月」の詩に「憂人不能寐 耿耿夜何長 微風吹闌闔 羅幃自飄颻」とあるなど。

注八 木越隆氏は、「曾丹集の表現——集中歌の解釈をめぐる——」（『言語と文芸』昭和四九年五月）で、この229番の歌は、白楽天の詩の「塵埃日夜侵」とか「塵埃滿樽杓」や、白楽天の座右銘の「千里始足下 高山起微塵」からの影響と述べられている。しかし、今見てきたように、もっと類似した表現をとる詩句が見られ、木越氏の説には領けない。木越氏の「曾丹集歌風成立私考」（『文学・語学』昭和三七三年三月）についても言えることだが、木越氏はさかんに白詩からの影響を説かれるが、白詩以外の漢詩文からの

影響も考慮しなければならないと思う。

注九 興膳宏氏 中国詩文選『潘岳 陸機』六一頁

注十 注八参照。

注十一 『平安時代の漢文訓読語につきての研究』

注十二 「曾丹集あれこれ」——訓読語との交渉——（『水門』昭和三十九年十一月）

注十三 築島氏の御指摘や、先ほど掲げた木越氏の漢詩からの影響が見られるという御指摘に対しては、滝沢貞夫氏が、万葉語からの影響と見るべきであると反論されている。

「曾禰好忠試論」（『文学・語学』昭和四三年七月）

注十四 熊本守雄氏「曾禰好忠の周辺——小野宮家との交渉の意味するもの——」（『国文学攷』昭和四三年四月）

注十五 「回文体の詩の書き様と回文の和歌」（『和歌文学研究』山岸徳平著作集Ⅱ）

注十六 『平安朝漢文学史の研究』四二六頁。

注十七 「雙六盤・碁盤歌と廻文詩について」（『平安文学研究』第三九輯昭和四四年十二月）

注十八 順は、永観元年（九八三）に七三才で任国能登で没している。「円融院御子の日」以下の「つらね歌」が作られた寛和元年（九八五）には生存していない。最初の「つらね歌」、順の双六盤歌の創作年時は不明。

注十九 碁盤歌の構成については、五島和代氏が、注十七で

- 第二列 夏
- 第三列 秋
- 第四列 冬
- 第五列 恋
- 第六列 恋

の部立に分かれるとされている。

注二十 注三に同じ。

注二十一 萩谷朴氏の『平安朝歌合大成』の呼称による。以下
歌合の呼称は同書による。

(追記)

本稿は昭和五四年四月二一日の第三十三回神戸平安文学会での口頭発表に基づくものです。その節、藏中スミ氏、稲田利徳氏から御批判と御質問をいただきましたが、その際の御質問に対しての解答としたつもりです。

発表の際、色々と御意見を賜った諸先生方に御礼申し上げます。

(にわ ひろゆき)